昭和27年8月11日第3種郵便物認可　平成24年8月1日発行（毎月1回1日発行）　第61巻8号　通巻719号

産業新潮

2012 8

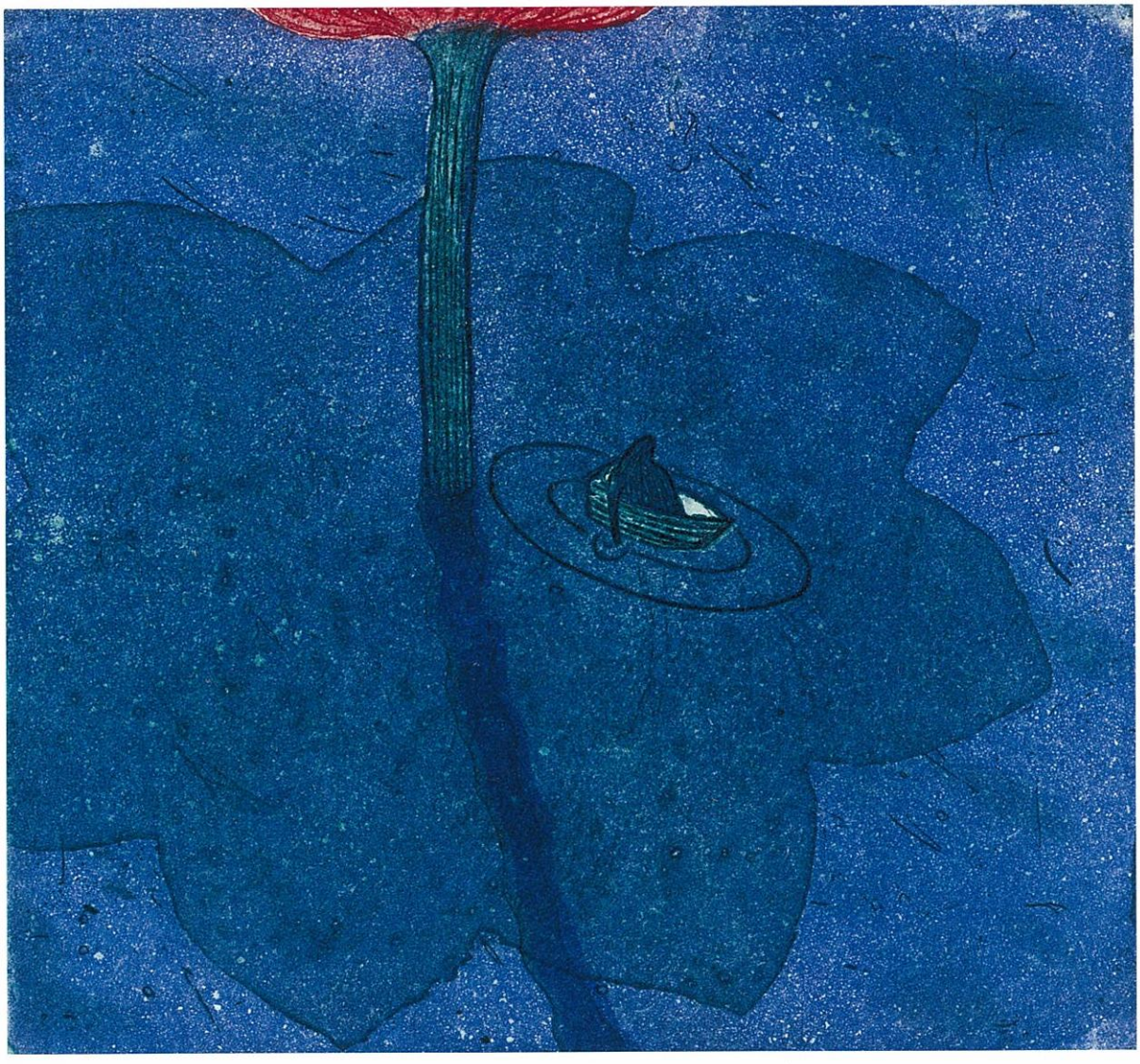
おかげさまで60周年

August vol.61 No.719

21世紀インタビュー

――農業は製造業―― 生産者の「自律」を原点に農業の更なる可能性を追求する

木内博一　農事組合法人 和郷園 代表理事



賢者の先見力 ――創刊50年から60年まで ⑦ 2008年

ノブレスグループ代表
川井徳子

Current

グローカル（GLOCAL）をミッションに地域の魅力と伝統文化を世界に発信

「物語力」で不動産再生と地域活性化をすすめ、悠久の遺産を後世に伝承

古都・奈良をベースに不動産、輸送、観光、デザインなどの事業を多角的に展開するノブレスグループ。その企業グループを率いる川井徳子代表は、グローバル化が進む今日の時代において、「グローカル」をミッションに、ローカル性を強調してやまない。ローカル性とは地域固有の歴史性であり伝統文化なのだが、川井さんはそれを「物語」と呼ぶ。その物語力によって不動産を再生し、地域に根ざした歴史や伝統といったかけがえのない固有の価値、文化を世界に発信する。「故郷である奈良をより活性化すると同時に、日本の普遍性を見いだし、世界に紹介することが私の仕事」という川井さん。今熱く時代を語る。

かわい・のりこ
1958年奈良県生まれ。不動産業、運送業、観光業など5つの会社を束ねるノブレスグループの代表。立命館大学卒業。97年に父親の会社を引き継ぎ、日本庭園「何有荘」をはじめホテル、ペットマンションやメディカルモールなど多くの不良債権物件を甦らせた。現在は「再生」をテーマに地方経済の活性化に全力を注いでいる。昨年12月に著書『不動産は「物語力」で再生する』を刊行。

著書『不動産は「物語力」で再生する』再生の鍵を握る世界観を育む「物語力」

昨年12月、川井徳子代表は、著書『不動産は「物語力」で再生する』を出版した。「病気や別離のない人生はありえません。失敗のない人生も、仕事も同じです。ミスやトラブルのない仕事など存在しません」と冒頭から自身の体験と重ね合わせてシリアスに訴える。

そして「人間は再生できる。ビジネスも生活も再生できる。輝きを取り戻すことができます。だって、私自身が一度無くしかけた命を取り戻し、再生できたのですから」と逆境を切り抜けてきた自らの人生と重ねて逞しい再生の力を強調する。

川井さんによると、その再生の成否を握るカギはその人が持つ世界観であり、また世界観を育む最も有効な方法は物語を紡ぐ力、つまり「物語力」であるという。

「次代を担う若い人たちが元気になるための本を」という出版社の勧めで筆を執ったそうだが、その著書にもあるように、川井さんのモチーフは再生にある。命にかかわる大病を克服した川井さんは、父親が亡くなった後に疲弊した事業を再生し、今地域の活性化、経済再生に力を尽くしている。そして川井さんは「再生」のキーワードは「物語力」だという。

川井さんが再生した作品のひとつに、京都の「何有荘」がよく引き合いに出される。「何有荘」は、明治28年に南禅寺の塔頭跡地に名庭師・七代目小川治兵衛によって作庭された。所有者が転々とし、後に競売にかけられ手入れもされずに荒れ果てたままだった「何有荘」を川井さんがみごとに復活させ、往時の姿を甦らせたのだった。

京都東山を借景にした「何有荘」は、庭園内の清流や滝の水に、すぐ東を流れる琵琶湖疏水の東山分水を取り入れているという。琵琶湖から8・7キロメートル離れている琵琶湖疏水の落差はわずかに3・7メートル、傾斜角度2000分の1という精密機械並みの精度を保つ。

その琵琶湖疏水を生かして造られた「何有荘」は、近代日本が誇る当時最先端の測量技術と土木技術が土台として全体を支えているといえるだろう。それ故、訪れる人々に対して伝統文化と近代化の先駆けたる京都の矜持「何有荘物語」を強烈に訴えかける。

ホテルアジール・奈良がミシュラン取得「奈良のお宿自慢」で建物・お部屋部門大賞

ところで川井さんが率いるノブレスグループは、ホテル、土産物店、飲食レストランなどを営むワールド・ヘリテイジ。貨物運送、倉庫管理、不動産賃貸業の新日本輸送。不動産コンサルタント、賃貸マンション事業のノブレス。WEBサイトや印刷物などのデザイン、ゲームソフト開発、IT事業のクーデザイン。そして関連会社を統括する持ち株会社のノブレス・セントラルの5つの企業グループから成る。

昨年10月に、ワールド・ヘリテイジが経営するホテルアジール・奈良が「ミシュランガイド京都大阪　神戸　奈良　2012」で、宿泊施設部門で2つのパビリオンマークを獲得した。

奈良の一等地にありながら経営破たんしたホテルを買収&再生して開業以来12年。木のぬくもりを大切に、訪れる客を古都のやすらぎで包み込む39室のこじんまりしたホテルだ。

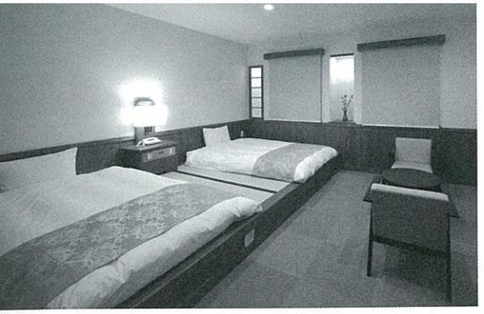
木肌の優しさが伝わるフローリングに暖炉と囲炉裏のある落ち着いた佇まいのロビー。上質な空間と静寂な時を演出するメゾネットスタイルのスイートルームは圧巻だ。

「アジールというのはギリシャ語で神殿、聖域という意味です。遥かな歴史とともに歩む古都・奈良の美しい世界遺産。人びとが織り成してきたその稀有な空間に佇むホテルアジール・奈良は、人の温かさを大切にしてまいります」と語る川井さん。

そして昨年のミシュラン掲載に続いてホテルアジール・奈良は、今年5月、奈良県が主催する「奈良のお宿自慢」表彰で、「建物・お部屋自慢の宿」の部門大賞に選ばれた。

庭園や神社の造営は土地を聖域化すること「物語」はその土地の固有のメッセージ

「何有荘」の再生事業に携わって以来、川井さんは日本の庭園や明治という時代についての関心が高まったという。とくに司馬遼太郎の『「明治」



ホテルアジール・奈良のスーペリアルーム
ミシュランガイド2012に掲載された

落ち着いた佇まいの、
ホテルアジール・奈良の
暖炉のあるロビー

という国家』を読み返して、改めて近代国家の草創期に想いを馳せて松下村塾に足を運んだ。

身はたとひ　武蔵の野辺に朽ちぬとも
留め置かまし　大和魂

吉田松陰

庭園についても「古来より、日本で庭を造るということはある場所を聖域化することではないでしょうか。庭園や神社を造営することは土地を聖域化することだと山口県の松陰神社を訪れて実感しました」と述懐する川井さん。

平安末期、伊勢神宮を詣でた西行はその心情をこう詠んでいる。

なにごとの　おはしますかは知らねども
かたじけなさに　涙こぼるる

川井さんは、「土地にはその場所に昔から言い伝えられてきた神話や物語があります。それはその土地がもつ固有のメッセージなのです。私たち不動産業に携わる者は、どういう理由でこうした庭や建物を造ったのかをきちんと言葉で説明するコンテクスト（文脈）が重要なのです」と指摘する。

産土神（うぶすなかみ）のようにその地に息づいている「由来」「言い伝え」「神話」といった忘れ去られた地域の物語を改めて今の時代に指し示すことが、川井さんが自らに課した使命である――というのだ。

今の日本では建築に対してアーキテクチャー（設計思想・哲学）という意識はあまりないのでは、とも。

「作庭もそうですが、建造物など空間をつくるということは一つの芸術作品を創作することでした。それだけにコンテクストを読み解くことで空間に入った人たちの意識に、作者の意図や想いの丈を伝える。それが物語力です」と言い切る。

作品をつくる側、不動産業を営む側にとってのコンテクストは非常に重要なものになる。コンテクストは土地や建物に由来する固有の「物語」、伝統文化を後世に伝承していく貴重なメッセージであるからだ。

今年は古事記が編纂されて1300年 記紀万葉プロジェクトに期待が集まる

明治以前に作成された奈良・興福寺周辺の古地図を前にして、川井さんは明治以降大きく変貌した興福寺周辺に見入る。

明治維新で打ち出された廃仏毀釈、境内地上知令などによって、古来権勢を誇った広大な敷地を持つ興福寺は荒れ果てた。明治政府は復興整備の一環として興福寺の敷地の約半分を上知（召し上げ）した。現在、奈良県庁や裁判所、文化会館などの公共施設が建ち並んでいる地区である。

「奈良は東大寺も春日大社もありますが、それは、遺跡ではなく生きた建造物として1300年も続いています。持続可能な社会を続けている世界でも稀（まれ）な歴史的文化都市なのです。故郷である奈良を、より活性化することが私の仕事だと心得ています。それが日本、ひいては世界の将来につながっていくと信じています」

力強く語る川井さんである。奈良の地域活性化、観光振興の大きなエポックとして2010年に平城京遷都1300年キャンペーンを展開して奈良は沸いた。登場したゆるキャラの「せんとくん」は今も全国的な人気を集めている。

そして、今年は古事記編纂1300年の年にあたる。日本の国の成り立ちや建国の精神を綴った古事記は、日本最古の物語であるだけでなく、日本人特有の民族の基本的な価値観や歴史観、自然観を学ぶ貴重な教科書ともいえる。

天武天皇の命令で約30年かけて完成された古事記は、稗田阿礼が誦習していたものを太安万侶が書きとどめて712（和銅5）年に献上された。そして2018年には日本書紀編纂1300年がやってくる。

「今、奈良県では記紀万葉プロジェクトが進行中です。遷都1300年を皮切りに、1300年をキーワードにした遷都、古事記、日本書紀のイベントを展開し、万葉集と合わせて奈良の物語を世界に発信していきます」と熱っぽく語る。

官民挙げての記紀万葉プロジェクトに大きな期待が集まっている。

奈良の戦後は〝蘇我氏と物部氏の戦い〟 風情豊かな奈良には多くの物語が溢れる

万葉集は言わずと知れたわが国最古の和歌集だ。7世紀前半から8世紀後半にかけて天皇から下級官吏、防人、庶民に至るまで4500首を収録し、759年に編まれた古代日本民族の生活が息づく大抒情詩の集大成である。

古代日本の風情を今に残す奈良は、さまざまな物語が横溢した土地であるといえる。その歴史性、スケールの広大さから言って京都をはるかに凌ぐ。

「京都で戦後といえば応仁の乱後のことだと言われるようですが、さしずめ奈良で戦後といえば蘇我馬子と物部守屋の戦いでしょうか」と川井さんは苦笑する。「奈良の神仏習合する空間は、血で血を争う戦の結果、人間の激しい葛藤の終わりに新しい調和のスタイルとして生み出されました」。

蘇我氏vs物部氏の戦いは、炊屋姫（後の推古天皇）の命を受けた仏法を信奉する蘇我馬子が、穴穂部皇子を擁した排仏派の物部守屋を破った587年の神仏戦争だ。これによって守旧派といわれた物部一族は没落し、開明派と唱えられた蘇我一族が抬頭し、以後仏教が急速に広まっていった。

今から18年前の1994年、京都は平安建都1200年祭でにぎわった。今奈良は、2010年の平城遷都1300年祭を起点に、今年古事記編纂1300年、6年後の日本書紀1300年と1300年祭を断続的に展開し、万葉集と合わせた記紀万葉プロジェクトが進行中で、関西圏・首都圏を巻き込む広域文化・観光キャンペーンに意欲的な取り組みを見せている。

「記紀万葉は奈良だけのものではありません。日本人にとって自らの有り様や生き方を学び直すための、一大プロジェクトです。是非日本全体で支えていただければと思います」と熱く語る。

遷都1300年のイベントに地元事業家の一人として参画した川井さんは、人一倍奈良の観光振興に精力的に取り組んでいる。奈良の名産、特産のアピールにも余念がない。

ならものが満載の、なら和み館の土産物店

自身の事業としてもワールド・ヘリテイジで、ホテルアジール・奈良、ホテルアジール・奈良アネックスのホテル経営などと並んで、カフェや食事処などが備わった「なら和み館」「平城京和み館」「きょうと和み館」の土産物店を営んでいる。

奈良の特産、「ならもの」を熱心に紹介 素朴で心和む「和」、奈良物語を世界へ

なら和み館は、大和牛や大和肉鶏、葛うどんなど奈良の名産物を用いた和風創作料理が有名だ。200人の団体客を収容できる大広間を備えた団体レストランとしての機能も持っている。

また、平城京和み館は平城宮跡に近いホテルアジール奈良・アネックスに併設されている。カフェとコンビニ機能も備え、観光客に快適と利便性を提供する土産物店だ。

さらにきょうと和み館は、京都のたばこ王・村井吉兵衛が1914（大正3）年に建てた旧・村井銀行七条支店で、大正ロマンの面影をそのまま残した築後100年の伝統的な建造物だ。大正時代のレトロな空間で優雅な時間を満喫できるレストランカフェ、食事処、そしてお土産ショッピングにと、それ自身が話題の観光スポットとなっている。

ところで、奈良の特産食材といえば、三輪そうめん、柿の葉すし、大和牛に大和ポーク、大和肉鶏。江戸時代日本一の生産量を誇ったという奈良の酒造。そして奈良漬けなどがよく知られている。

そうめんは奈良・桜井市が発祥で、同市三輪地区の三輪そうめんは今から1200年以上前に大神神社の宮司、大神朝臣狭井久佐の次男・穀主が初めて作ったといわれる。

なら和み館では、「和」をキーワードに奈良の名産品や和雑貨などを「ならもの」と称して、新しい奈良のお土産のカタチとして提案している。京都の洗練された「和」とは異なり、奈良の素朴で心和む懐かしい「和」であると説明している。

なら和み館は、「土産物のプラットフォームを作ろう」と構想された。奈良はJR奈良駅と近鉄奈良駅がバラバラでターミナルとなっていない。観光の玄関口が一つとなっていないため、数多くの観光客がやってくるのに、まとまったお金を落とすプラットフォームがないのだ。電車ではなくバスで訪れる観光客にしても大型の駐車場が少なく、トイレ休憩にも困っていることを聞き、奈良公園近くの倒産したレストランを改装したのが、なら和み館だ。奈良の観光産業を育成するという視点を持って事業を展開し、自社の商品にこだわらず多様な品揃えを心掛けた結果、大型バスがひっきりなしにやってくるようになった。

奈良の名産、特産の「ならもの」のアピールに力がこもる川井さんだが、同時に奈良の心和む「和」食の研究に余念がない。

「ル・ベンケイの尾川欣司社長（オーナーシェフ）の推薦で社団法人国際観光日本レストラン協会に入会させていただきました。しっかりお食事の勉強をして、日本文化の粋でもある奈良の和食を国際社会に提供していくことが次の課題です」と目を輝かせる。

不動産再生と地域活性化をモチーフとする経営者としての川井さんの成功へのキーポイントは「物語力」である。ホテルアジール・奈良では、不良債権だったホテルを見事に再生させ、ミシュランで2つのビブリオンマークを取得し、地元奈良県の「奈良のお宿自慢」表彰で建物・お部屋自慢の部門大賞施設に選ばれた。

事業家として、また不動産専門家としての見識の高さ、目利きの確かさが改めて高く評価された川井さん。グローカルをミッションとし、今また記紀万葉プロジェクトで期待の集まる「奈良」を世界に発信するノブレスグループの川井徳子代表に熱い視線が注がれている。

（小川洋一）